

ビワキジラミに対する各種薬剤の効果と薬剤散布における注意点

府中果樹研究所 生咲 巖

開花始期と袋かけ前の各時期でのビワキジラミに対する薬剤の効果を検討したところ、いくつかの有効な剤が確認できました。

ビワキジラミの被害

成虫・幼虫ともに樹液を吸汁し、「甘露」として排泄します。これが枝葉や果実に付着すると、すす病が発生して黒く汚損されます。



成虫



幼虫



すす病による果実被害

結果

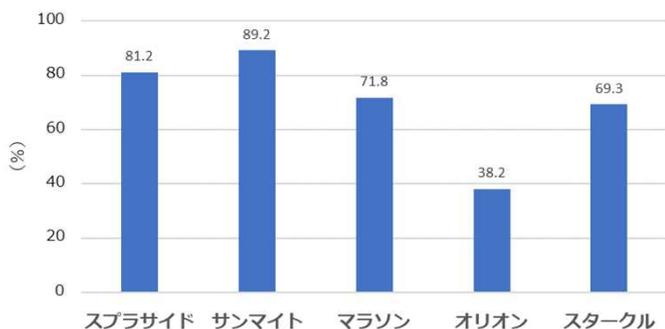
(1) 開花始期 (11月中下旬) 散布

スプラサイド乳剤40とサンマイル水和剤は高い防除効果が認められ、次いでマラソン乳剤とスタークル顆粒水溶剤で防除効果が認められました。

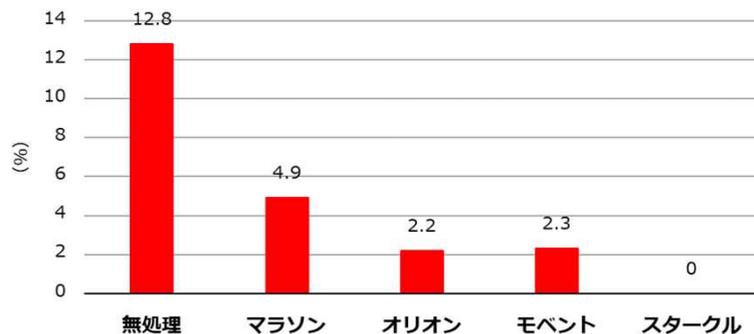
(2) 袋掛け前 (3月下旬頃) 散布

スタークル顆粒水溶剤は高い防除効果が認められました。その他の薬剤は多発生条件下では効果が劣ると考えられます。

散布7日後の防除効率



出荷不可能果率



薬剤散布における注意点

全期間

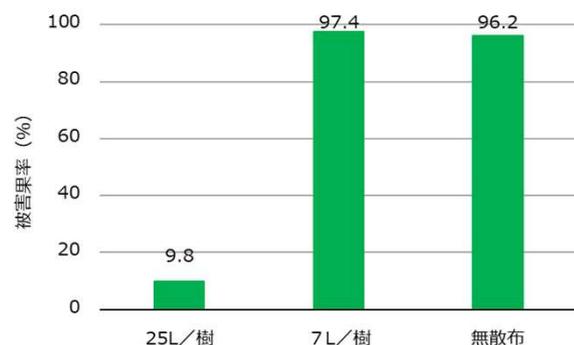
- 高さ3m以上、樹幹部の直径4~5m程度の成木では20~30L散布する必要があります。
- 「まくぴか」、「スカッシュ」、「アプローチBI」などの展着剤を加用すると効果が高くなります。

袋掛け前

- 余分な花カスを取り除き、仕上げ摘果を行った後に果実を中心に散布すると効果が高まります。
- 散布後は薬液が乾いたら速やかに袋掛けする必要があります。

開花期頃から幼果期頃

- 開花期頃から幼果期頃は、花房(果房)や生長点付近を集中的に散布します。
- 花房がある程度伸長して、花や蕾の間に隙間ができてからの散布がより効果的です。



散布量が少ないと防除効果が得られないことがあります



固く締まった花蕾



隙間ができた花蕾